

「もう、いつ死んでもかまわない」

(ルカによる福音書 2:22-40)

今日は主イエスが律法の規定通り、生まれて 40 日目に神殿に献げられたことを記念する被献日です。出産後のマリアにとっては、規定の日程が過ぎ、宮参りが許された日でもありましたので、かつては「被潔日」とも言われたようです。またこの日は、幼子イエスを抱き上げたシメオンが「異邦人を照らす啓示の光」と讃えたことから、キャンドルマスがささげられるようにもなりました。このように、今日の福音は登場人物それぞれにストーリーがあります。皆さんはどのように、誰の視点でこの福音を聴いたのでしょうか。

さて、今日の旧約聖書で契約の使者とされ、待ち望まれた救い主がいよいよこの世に来られ、律法の規定通り、他の幼子と同じように神殿に献げられました。シメオンはこの幼子を「腕に抱き」、喜びに満たされました。「腕に抱き」と訳された単語の直訳は「受ける」で、神の国や御言葉を「信じて受け入れる」という意味もあります。シメオンは幼子をただ腕に抱いたのではなく、遙か昔から待ち望まれてきた救い主を今「受けた」のです。なんとという喜びだったのでしょうか。

「主よ、今こそあなたは、お言葉どおりこの僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目でああなたの救いを見たからです。これは万民のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉れです。」と「シメオンの賛歌」が神殿に響き渡ります。生涯かけて待ち望んだ救い主を受けたシメオンは今、生きてきた目的が達成された喜びに満たされ、いつ死んでもかまわないと、高らかに賛美しました。

わたしが神学生の頃、実習先の教会でご葬儀の奉仕をさせていただきました。いよいよ火葬場でご遺体が火に委ねられようとしている時、突然牧師がシメオンの賛歌を歌い出しました。当然、火葬場には他の団体も沢山います。わたしは驚き、恥ずかしくなってしまいました。しかしわたしは後で、恥じたことをとても後悔しました。牧師は心から、今火に委ねられようとしているその人の一生が主イエスの光に照らされた尊いものであったこと、そしてその一生を導かれた神を賛美したのだと思い至ったからです。それと同時に、自分自身も覚悟を決めて、シメオンが「死んでもいい」とまで喜び抱き上げた主イエスに従って歩みたいと感じました。被献日のたびにあの火葬場でのことを思い出し、自らの信仰を振り返っています。